

記紀歌謡に歌われたもの (一)

—鳥を中心に—

岡 田 喜久男

卒直に言って、大きな恐怖感を持たずに詩や和歌を創る事は私には出来ない。それは、才能が無いことを意識する事や、人々が何と
思うか、どう詠むかの不安もあるが、それ以上に恐いことは、自
分の気持があまりに露になる事や、自分の世界があまりに狭い事へ
の恐怖である。論文を書いたり、人と話したりする時は、何も不安
は感じないが、一度詩歌の創作にむかう時、不安やためらいが一度
にこみ上げてくる。この事を裏返して云えば、詩歌は自己の最も素
直な心情を写すものであり、自分の住む世界（それは環境、教養等
から世界観迄）から一步も出る事の出来ない見えない鏡であると云
えよう。私のこのような思ひは、そのまま上代歌謡にまで遡れると
思うのである。又それだからこそ、歌謡を研究し歌謡を味わうこと
の意味があるので、もし、小説や幻想の類であるなら、我々は臆気楼
を追い求めている砂漠の旅人のようにあてもなくさ迷う事になる
う。記紀歌謡を作り歌い伝えた人達も、私達以上に彼等の住む世界
を一步も出る事は出来なかつた。私達はそれでも若干は自らを偽り
夢想する事が出来る。見ぬ物を語り、理想の世界を歌う。然し古代
日本人は自分達のまわりを歌い、^{△▽}実際見て、手に捕える事の出来る

記紀歌謡に歌われたもの (一) —鳥を中心に—

物しか歌わなかつたといつてよい。古代日本人の想像力の低さにつ
いては屢々言われるのであるが、それもやはり狭い自個の周囲から
抜け出る事の出来なかつた事を意味すると思う。古代日本人が何を
見、何を歌つたかは歌詞を調べれば分るし、どのように歌つたかを
見れば、古代日本人の精神がよく分るであらう。記紀歌謡には様々
なものが歌はれている。神が、天皇が、恋人同志が、兵士が、植物
が、そしてここに見ようとす動物なかんずく鳥が。人間と動物の
関係は人間が地球上に現れた時からの長く、そして深いものであつ
た。今日でも動物は人間の食料であり、労働力であり、更に友人で
ある。然し古代日本人にとって動物はその他に歌の大きな題材であ
る事に於いて一層私の興味をひくのである。実際にどのように歌は
れていたか、それを先ず見てみる事にする。（なお歌詞は日本古典
文学大系本「古代歌謡集」によつた。又歌詞の上下の算用数字は「
古事記歌謡」を、漢数字は「日本書紀歌謡」の歌番号を示すものと
する。）

(2) 青山に鶯は鳴きぬ、さ野つ鳥雉は響む 庭つ鳥 鶏は鳴く
この鳥も打ち止めせね

(3) 我が心 浦漕の鳥ぞ 今こそは我鳥にあらめ 後は汝鳥にあら
むを

(4) 沖つ鳥 胸見る時 羽叩きも こは相應はず……鳩鳥の青
き御衣を ま具に 取り袷ひ 沖つ鳥 胸見る時 羽叩きも
此も相應はず……沖つ鳥 胸見る時 羽叩きも此し良ろし……

群鳥の 我が群れ往なば 引け鳥の 我が引け往なば

(8) 沖つ鳥 鴨着く鳥に (五に重出)

(9) 鴨繙張る……我が待つや 鴨は障らず いすくはし 鯨障る。
(七)

(13) 細螺の い這ひ廻り 撃ちてし止まむ (八)

(14) 鳥つ鳥 鴨飼が伴 今助けに来ね (十二)

(17) 胡鷲鶴鶴 千鳥ま颯 何と開ける利目

(27) とかまに さ渡る鶴

(37) 濱つ千鳥 濱よは行かず 磯傳ふ

(38) 鳩鳥の 淡海の海 (二十九)

(42) この蟹や 何處の蟹 百傳ふ 角鹿の蟹 鳩鳥の 潜き息つき

(43) 上つ枝は 鳥居枯らし (三十五)

(47) 品陀の 日の御子 大雀 大雀 (人名)

(59) 山城に い及け鳥山 (五十二)

(60) 御諸の その高城なる 大章古が原 大猪子が 腹にある 肝
向かふ 心をだにか……

(66) 女鳥の わが王の織ろす服 誰が料ろかも (五十九)

(67) 高行くや 速總別 御襲が料 (五十九)

(68) 雲雀は 天に翔る 高行くや 速總別 鷓鴣捕らさね (六十)

(71) そらみつ 大和の國に 雁卵産むと聞くや (六十二)

(72) 大和の國に 雁卵産と いまだ聞かず (六十三)

(73) 汝が御子や 遂に知らむと 雁は卵産らし

(83) 波佐の山の 鳩の 下泣きに泣く(七十二)

(85) 天飛ぶ 鳥も使そ 鶴が音の 聞えむ時は

(87) 阿比泥の濱の 蠣貝に 足踏ますな

(97) 黙伏すと……黙待つと……手胼に 蛇掻き着き その蛇を
蜻蛉早昨ひ……蜻蛉島とふ(七十五)

(98) 遊ばしし 猪の 病猪の 吼き恐み(七十六)

(100) 蠶衣の 三重の子が

(102) 鶺鴒鳥 領巾取り掛けて 鶺鴒 尾行き合へ 庭 雀 照

集りあて

(109) 遊び来る 鮪が鱧手に 妻立てり見ゆ(八十七)

(111) 大魚よし 鮪突く海人よ……鮪突く志毘

(四) 濱つ千鳥よ

記紀歌謡に歌われたもの(一) —鳥を中心に—

(三) 瀬田の渡りに 潜く鳥

(三) 瀬田の渡りに 潜く鳥

(四九) 夏蠶の 蠶の衣

(六五) ささがねの 蜘蛛の行ひ

(七九) 人街らふ 馬の八匹は 惜しげくもなし

(八二) ぬばたまの 甲斐の黒駒 鞍着せば 命死なまし 甲斐の黒駒

(九二) 吾が欲る玉の 鰻白玉

(九七) 黙じもの……鮪の若子を 漁り出な猪の子

(一〇六) 穴申ろ 熟睡寝し間に 庭つ鳥 鶏は鳴くなり 野つ鳥

雉は響む

(一〇七) 水下ふ 魚も 上に出て嘆く

(一一三) 馬ならば 日向の駒

せている。又「鷓鴣の」では倭名類聚鈔に「爾雅集注云 鷓音立音見日本紀見
小鳥也色青翠而食魚」とある如く、美しい青色を現わしている。又
「群鳥の」は譬喩と同音の利用で「群れ往なば」にかかり、一羽の
鳥が飛び立つと他の鳥も一勢に飛び去る鳥の習性を描いている。「
引け鳥の」も前者と同様「連れ立って飛んでは、天の一方へ去って
行く」鳥の姿である。

(8) では「沖つ鳥」が鴨の枕詞となり、(2)の「さ野つ鳥」や「庭つ
鳥」の如く或種の鳥の棲息地を表している。場所の明示の為に鳥が
歌われたのである。この枕詞は萬葉集でも味あじ(あぢ鴨のこと)と鴨
に掛っているし

沖に住も小鴨のもころ八尺鳥

息づく妹を置きて來のかも3527

を見て、かなり「沖の鳥——「鴨」という觀念が固まっている事
を示している。所が(4)の歌では「沖つ鳥胸見る時……」の如く、枕
詞的序詞の役割を果しているのである。これは、鳥の仕草への着目
と棲息地への着目との違いという事が出来る。ついでに述べてお
くと、「沖つ鳥、鴨とふ船」の如くこの枕詞の萬葉集三八六六、三
八六七に於ける概念的用法や書紀及び歌經標式に重出されている事
実を考え合わせると、よく言われるようにこの(8)の歌謡の成立時代
はかなり降るのではないかと思われる。

(9) では「鴨 網なま」を張って待つうちに、鴨より大物の久治良が思
いがけなくかかった喜び、を描き前段をなしている。

(4) 「鳥つ鳥」は明らかに枕詞の意識で用いられているが、「さ野
つ鳥雉」や「庭つ鳥鷄」と同様、鳥の住んでいる場所に注目してい

記紀歌謡に歌われたもの(一) — 鳥を中心に —

る。これと同じく鶉にかかる用例は萬葉にも見出される。

(17) 「胡鷲」、「鶉鷄」、「千鳥」、「ま鶉」は大久米の命の「利目」を
鳥の目の鋭さに喩えて具体的に示しているし、同時に一種の韻律美
をさえ導き出している。

(18) 「濱つ千鳥」は「沖つ鳥」「鳥つ鳥」と同様、鳥の居る場所に
注目した表現である。

(19) 「鳩鳥の」は日本書紀の類歌(四二二)に於て直接「かづきせな
」にかかっている事でも分るように、カイツブリが好んで水にもぐ
る様子から生れた枕詞で、萬葉集では「おき長川」「かつしかわせ
」「ふたならびる」「なづさひゆけば」等に掛っている。記紀歌謡
の場合は倭名抄に、

鶉鷄 郭璞方言注云鶉鷄鶉鷄二音和途途野鳥小而好没水中也……

とあるのが大いに参考になるのではないだろうか。鳩鳥の様子が愛
情をもって細かく見られている。

(47)、(49)、(60)、(67)、(83)、に於ける人名と鳥との関係についてはよく
分らないが、古代の人名のつけ方をさぐる手掛りになると思われ
る。

(83) の歌では天高く飛びかける「雲雀」が「速總別」へと平行移動
している。この場合も、一種の場所を意識した発想である。

(71)(73)に現れる「雁」は、鳥自身に対する興味よりも「雁が卵を
産んだ」という事実注目されており、結局それは端祥としての意
味を持っているのである。これは季節や天然現象に突然変異が起っ
た場合、それを兇徴とみるか祥瑞と見るかを真剣に占った事と相通
ずるものである。

⑧の歌に於ける「鳩」程記紀歌謡中に於いて胸を打つ「鳥の歌い込み方」はない。一度聞いたら忘れられぬ、あの鳩のくくもり声は「下泣き」の語をまことに具体的に表現しているのである。又、この歌で「鳩の」が実に生き／＼と迫ってくる大きな理由は、この歌が鳩の姿よりも声を聞いている事である。この歌謡以外で鳥の声を聞いている情景は、②⑧及び(三)、②と密接な関係にある日本書紀の(六)に現われるにすぎない。その中でも実際の鳥声を髪髻とさせるのはこの⑧のみである。

⑨の歌は、鳥を使とする思想に基いている事は明かである。橘守部が「稜威言別」の中で、

「凡て使は急速を主とするものなれば云々」といってその発想の生れる理由を推定しているのでよいと思う。その例証として、仁徳天皇の御歌を屈ける使いをした舎人の名が鳥山であった事が思い出される。

⑩の鶉鳥はその鳥の胸にある白斑(形態)から枕詞的に領布(ひれ)に掛かり、鶉(動作)は尾を引いて歩く姿から大官人の動作を叙し、庭雀の集団で大官人の集合した姿を描出している。ここで鳥は最大限に描出力を引き出され、聴く人に明瞭な具体像を与えている。

(三)の、潜く鳥はもたらん鳩鳥の事で、琵琶湖に遊ぶ鳩鳥は記紀万葉を通じて屢々歌われているし、「鳩の海」は琵琶湖の別称となっている。但しこの歌の中で「カイツブリ」の水中に潜る姿は、その愛らしい様子に反して、謀叛に敗れた忍熊王が投身した事の譬喩となっている。

(早)の浅野の雉は、鋭い声で遠くまで鳴きとよまず雉から、他人の

噂に喧しい人間の性へ転じている。

(三)の鴛鴦は、雌雄離れることのないので有名であるが、それを和名抄では「鴛鴦乎」雌雄未嘗相離一人得其二則其一思而死故名匹鳥也」と書いている。この鴛鴦の歌われ方は「詩経」の中に出てくる「関関雉鳩 在河之洲、窈窕淑女 君子好逑」から来ていて、夫婦愛の象徴であり、作者が史である所から考えても觀念上のと言うより文芸的な鳥の詠み込み方と言えよう。

(三)の雁々は農作物を食い荒す悪鳥として歌われそれは童謡としては新羅の百濟への侵寇を喩えているようである。

以上、鳥に関する詞句が上代歌謡でいかなる役割を果し、意味を持つているかを見て来たが、その描出回数多き及び、内容に密着している事は予想を上廻るものであった。鳥の色、姿態、習性、動作、鳴き声、栖処、更に鳥に関する云い伝え、とこれ以上考えられない位、注意深い観察と愛情が鳥に対して注がれているのを認めるのである。鳥に関する詞句を除いた上代歌謡は、花に関する詞句を除いた古今集以上に考えられないのである。更に記紀歌謡全般を見渡すと、前にも述べたように、鳥の美しい鳴き声に興味を持って歌ったものは一首もなく、その殆んどが常々鳥の住んでいる場所、及び鳥の姿形・動作にある事に気付く。事実美しい声の鳥名も見当らないので、鶯のような美声の鳥(平安朝の鶯が今日のような鳴き方をしたとして)は記紀時代になかったかもしれないが、雲雀、鶉雀、千鳥と万葉時代にはその声を詠み込まれている鳥もあるから、そこには何らかの理由があると考えるべきである。

人間には「視覚型」と「聴覚型」があるとすると、古典心理学の分

類方法を借りるなら、上代の人達はこの場合視覚的であった、といえるであろう。鳥の声を聴かなかつた等という事は考えられないし又鳥の声は、自然と今より数倍も親密であつた上代人にとつて、ある時は楽しげに、ある時は不気味に、ある時は淋しく心に染みた筈である。それなのに、美しくも、楽しくもない「鳩の下鳴き」以外に歌謡に登場していない鳥の声、その反面、小さな仕種も見落さないうで歌はれた鳥、それはやはり上代人の視覚的性質が、聴覚のそれに優越していた事に他ならないと思う。人間の感覚中、聴覚より視覚が優越するという実験心理学の証明は、^{四五}記紀歌謡のような初期の感情の率直な表現の多い文芸に於いては必然的に応用できると考えていいのであろうか。その意味では原始的の心性の現れとも云えよう。

以上、歌謡の中のみを見たが、鳥は古事記、日本書紀の地の文中でも数多くの場面・神名・人名・諺・物語の転開等に登場する。その一例、古事記上巻、天若日子の送葬の条を見ると次のように描かれている。

乃ち其處に喪屋を作りて、河鴈を岐佐理持と為、鶯を掃持と為、^{そじり}翠鳥を御食人と為、雀を稚女と為、雉を哭女と為、如此行ひ定めて、日八日夜八夜を遊びき。

この場面に登場する河鴈や鶯の役割と形態や習性の関係も興味深い。が、それよりもこれらの諸鳥に書紀が言うように「凡以衆鳥任事」(一)事を任した真意がどこにあったのか極めて注目させられる。靈魂の復活を促す呪術であるとか、鳥の舞の反映であるとか、その両者は一体であるとか、様々に解かれているが、今歌謡で見たように

鳥の姿態や習性の中に「両手を広げ、首をまげて衣裳の着具合を見る人間」との類似性や、「主君に卒いられ一せいに出發する様子」を見出ししている上代人にしてみれば、舞の中に鳥の動作を取り入れ、それを模倣劇に發展させたとしても決して不思議ではない。鳥は今日のように求めてやつと見たり聞いたりする事の出来るものではなく、人間の身近で無数に飛び翔り歌っていた。それにしても、地の文以上に歌謡における鳥の語り込みは頻出し、愛情を注がれていて、多様である事、またその語り方が素材である点で実生活のかこみを出る事のなかつた古代人のいぶきが感じられるのである。

註

一、額田王の有名な「春秋判定歌」巻一〇は春の花と秋の黄葉を比べて「手に取つて賞美することが出来る」という美の範疇からすると二義的な理由で秋に軍配を挙げているが、ここにも手に取つて賞美する事の重要さが、苦しまぎれの中にも出ているのではなからうか。

二、平野仁啓「古代日本人の精神構造」収載、「古代日本人の想像力の構造」の中に詳しく述べられている。その一部を引用すると「写実性の乏しきと言う言い方よりも、想像力のよびおこす像の不明瞭さと言うべきであるかもしれない。そこには古代日本人の想像力の活動の貧弱さが露出しているのを見ないわけにはゆかないであろう。P 21」更に松村武雄「日本神話の研究」第二巻四百十四頁―四百十九頁にかけて指摘されている「黄泉國の表象の単純さと漠然さ」も想像力の欠如に由来すると考えられる。

三、自然界の産するものを捕えたり、採ったりする他手段を持たなかった時代には、植物の食物としての価値は自然との密着という意味で非常に高かった。オーストリア人のトーテムは、大部分食べられる種類の植物や動物といわれるし、松村武雄氏の「宗教及び神話環境」頁六五〇によると、『阿弗利力士族の或るものは、あらゆる植物を bush と good for nyam とに区別している。前者は食用になり得ないすべての植物の総称であり、後者は食用になるすべての植物の総称である。彼等にとっては、植物はただ食べるものと、食べないものとしてののみ、関心の対象となっている。』
という事である。

四、波多野完治「文章心理学」第二章「感覚類型とスタイル」に詳しく述べられている。

五、「ヤングの研究」と呼ばれる有名な実験で逆聴装置で実際の音の方向を逆にして聞いても、目を開けていると普通に聞えるというのである。